

を上げていたようだ。
将に、東京オリンピックの夢が正夢
となつてゆつくり、ゆつくり近づいてく
る胸の高鳴りを抑え切れぬもの
だ。

伸びゆく天稟

いやりファミリー

皆さんがご承知のように、「いやり
ファミリー」には、五十組余に及ぶ夫
婦がそれぞれの家庭を切り盛りし、
わが子のために日夜一生懸命に働い
ている。

本当にご苦労さんです。
その子・孫・曾孫を含めると、百四、
五十名を超える大世帯を形成してい
ることは親子、兄弟姉妹の強い絆で
あります。

皆さんに支えられて「いやり新聞」
の部数も五十部を発送し、遠くは千
葉、東京、沖縄本島、石垣はもとよ
り、西表、黒島までの範囲で、ご愛読
をいただいているところである。

左に掲げる学生諸君は勉学に、ス
ポーツに友達と共に励んでいる前途
有望で、将来の成長が親ならずも期
待するところである。

- 花城 直―亜細亜大 野球部
宮良当志郎―朝日大学(岐阜県)
比嘉佑太―読谷高校 サッカー部
玉代勢寛太―興南高校 バスケット
部
根波咲子―興南高校
金城航大―西原高校マーチング
バンド部
田場栄祐―美里工業高校
田場竜己―美来高校
松山琉王―鏡原中学校
大盛蒼生―金城中学校

那根 碧―金城中学校 野球部

「末は博士か 大臣か」の例えのよ
うに、オリンピック選手か、プロ野球
選手か、サッカー・バスケット選手か、
世界をめざすマーチング団員か、芸
術の道か、教師か、枚挙にいとまのな
い程の「夢と希望」が彷彿する心揺さ
ぶる心地である。

翔け 若鷲たち！ ガンバレ！

もう一人 営林業に生きた男

黒島の森林王 明治三十一年六月一日生

亡き岳父 玉代勢太郎氏

今から五十五年前(昭和三十五
年)の琉球政府経済局・林務課が発
刊した「みどり」第一号に「緑化運
動におくる話題―八重山・黒島の
玉代勢さん(沖縄タイムス)が掲載さ
れていた。

「イモ」をつくるよりは、木を植えた
方がとくだ、と四〇年間木をいつく
し育て、それで実益をあげてきた
篤農家を紹介しよう。
話題の主は、竹富町宇黒島の玉代
勢太郎さん(現竹富町会議長)であ
る。

玉代勢さんの造林地は、一五町歩
(一四八六アール)、ヤラブ七割にイ
ヌマキその他三割の混交林だが、黒
糖が反収六丁とみて五十ドル、それ
から生産費三三ドルを差し引いた一
六ドル余りが収益となるが、これを
造林にみた場合、反収手どり一二ド
ル五十セントあたり、黒糖とほぼ同
じ収益があるというのが「造林はもか
る」計算の基礎。
事実、玉代勢さんは、本土留学の
長男、泰徳さんの学費をほとんどこ
の収益であてている。

▲島司の話に一念発起―玉代勢さん
の造林から出るヤラブは家具用材と
して、毎便のように那覇、宮古向け
積出され、これに刺激された部落民
も今では、村をあげての造林熱で、
黒糖、畜産とやらんで造林が島興し

の有力産業となっている。

玉代勢さんが造林を始めたのは、
二十五、六才のころで、その動機と苦
心のアレコレを次のように語っている。
当時、青年団長をして、部落の集
まりにもよく出席していたが、たま
たま八重山島司(地方庁長にあたる)
の和田さんが来島、黒島の発印
象を語った。
その感想がなんと「黒島は人間が
裸になって立っているような」というこ
とだった。

初めての来島でこのようなコトバは
おかしい何かを意味しているのではな
いか、と不思議に思い重ねてたずね
たところ、和田島司は「人間が生活
を営む上には木が必要である。農業
も、水産業も、防風にも生活すべて
は木に負うところが大きい」と答えた
そう。

それから造林の必要性を痛感。一
念発起した。

▲始めの頃は氣遣い扱い―大正七
八年の当時、若い玉代勢さんが植
林を始めたのをみて、部落の人たち
は「夢を見ているのではないかと」、相
手にしてくれなかった。

しかし、玉代勢さんは、がんばった
。というのは、玉代勢さんは女手一つ
で育てられ、家というの形だけのア
ラ家同様なものなので、母のために
母の瞳の黒い間に、ぜひ自分の造った
木を使い、自分の手で家を建てて母
に報いたい。という心に誓ったものが
あったからでもあった。

だが、サテ、実行にうつすまでには
相当な苦労が伴った。

まずタネ(樹種)だが、これは石垣
島の当時ウインドウパと呼ばれた
広場や桃林寺境内に繁る大ヤラブの
下に散っていたタネを集めた。
また、波照間島からもわけてもら
った。(ところで今日では種をわけて
もらった、波照間よりも黒島の方が
ヤラブ林は多い)次に、アダン山を切
り払い、農耕に適しない砂地にも一
本一本植えた。

最初真白な砂地には、容易に根は
つかなかった。しかし根気強く植え
た。
ところが七、八年もすると、クチ葉
がつもり、これが肥やしとなって漸く
植付けられるようになった。
それから、他所の不用な土地と自
分の耕地を交換分合してもらったり

して、毎年毎年忍耐強く造林作業
を積み重ねていった。
現在は、十五町歩にも増え、三十
六年も余る樹齢となり、かつて不毛
の地だったところが今では良い土地と
なり地価も上がった。

▲村をあげて造林熱―最初玉代
勢さんを氣遣い扱いしていた部落の
人々も「こんな一帯で立派な造林
ができ、金になるとは思わなかった」と、
今では村あげて造林熱がみなぎ
り、竹富町でも一番良い造林島とし
て認められるようになった。
現在部落経費も部落有林の収益
で賄われている。

八重山に来島して黒島の玉代勢さ
んの造林地を訪れる外来者はすく
なくない。
昨年早大の西村朝日太郎博士を
はじめ、門馬農林技官、大政東大教
授とあとをたたない。
ことに大政教授は「八重山にきて、
はじめて黒島をみるべきものをみた」と
玉代勢さんの造林をほめたほどで
ある。

人間一代の努力の成果―また

早大の西村博士は、一昨年の暮、黒
島を訪問、正月休みの一週間を玉代
勢氏と共に過ごしたが、帰京後、東
京新聞(夕刊)昭和三十一年二月一
日号に「玉代勢氏の篤林ぶりを紹介
」の二〇代から植林と牧場に没頭した
かいあって、今では不毛のサンブ島に
ヤラブ、マキの密林がスクスク天を摩
して繁茂している。

私は個人の絶えざる努力が一生の間
にどれほどの成果をもたらすかをさ
まざまみせつけられる思いがして頭
が下がった」とのべている。

なお玉代勢夫妻は、ウミにまみれ
た孤児たちをひきとり、わが児のよ
うに可愛がっているという、かくれた
隣人愛の持ち主でもあり、木を愛
し、人を愛し続けている徳望家である。

きょうも、同氏の所有する第一興
進丸(四五馬力)は造林地から出る
ヤラブ材を生活に必要な家具にする
ため、黒島からポンポンと威勢よい発
動機船の音とともに運び出してい
る。(沖縄タイムス 一九六九、三、一五より)